

## 保育士による「保護者支援」実践のプロセス

—「子どもへのかかわり」の支援に焦点を当てて—

寺 菌 さおり 埼玉大学教育学部乳幼児教育講座  
吉 川 はる奈 埼玉大学教育学部生活創造講座家庭科分野  
上 岡 紀 美 兵庫教育大学連合学校教育学研究科

キーワード: 保育士、保護者支援、プロセス

### 1. はじめに

昨今、減らない母親の育児不安に対して、「健やか親子 21（第2次）」（厚生労働省）では様々な取組を行なっている。母親の育児不安は子どもの QOL（Quality of life; 生活の質）や母親としてのアイデンティティの形成に影響し合い（浅見ら 2013）、母親としてのアイデンティティの形成には母親自身が育児に対する効力感を抱くことが重要である（山口 2010）。以上より、母親の養育者としての発達を支えることは母親の育児不安を軽減するだけではなく、子どもの QOL も高めるものと推察される。

さて、平成 30 年に改定された保育所保育指針においても、前回の改定と同様に、保護者支援は、保育所を利用している保護者に対する子育て支援として明文化されている（厚生労働省 2018）。具体的には、各家庭において安定した親子関係が築かれ、保護者の養育力の向上につながることを目指して、子どもの保育に関する専門性を有する保育士が専門的知識・技術を背景としながら行なうものと示されている。

保育所保育士の専門的知識・技術とは、①これからの社会に求められる資質を踏まえながら、乳幼児期の子どもの発達に関する専門的知識を基に子どもの育ちを見通し、一人一人の子どもの発達を援助する知識及び技術、②子どもの発達過程や意欲を踏まえ、子ども自らが生活していく力を細やかに助ける生活援助の知識及び技術、③保育所内外の空間や様々な設備、遊具、素材等の物的環境、自然環境や人的環境を生かし、保育の環境を構成していく知識及び技術、④子どもの経験や興味や関心に応じて、様々な遊びを豊かに展開していくための知識及び技術、⑤子ども同士の関わりや子どもと保護者の関わりなどを見守り、その気持ちにより添いながら適宜必要な援助をしていく関係構築の知識及び技術、⑥保護者等への相談、助言に関する知識及び技術、の六つである。柏女（2010）によると、保育士の専門性を生かした保護者支援とは、保育士の保育技術と保育相談支援技術（支持、承認、助言、解説、情報提供、物理的環境の構成、行動見本の提示、体験の提供等）の組み合わせによるものであると言われており、①～⑤が保育士の保育技術、⑥が保育相談技術に該当すると考える。そして、保育所における保護者に対する子育て支援は、子どもの最善の利益を念頭に置きながら、保育と密接に関連して展開されるところに特徴がある（厚生労働省 2018）。

しかし、多くの保育士は保護者支援の困難感を抱え、試行錯誤しながらその業務にあたっている（高橋 2015）。亀崎（2015）によると、「子どもの最善の利益」という価値をめぐる「保育士-保護者」関係の難しさがあり、子どもの視点を保持したまま、保護者の視点に立って支援を行なうこ

とは保育士に葛藤をもたらし、保育を担う保育士の保護者支援が困難になるという。例えば、発熱のある子どもの保護者との対応にあたって、保護者が自分の都合を優先させる態度や感染の流行を予防するという集団保育における健康管理の重要性を保護者に指導することの困難さが明らかにされている（小代ら 2014）。また、岸本ら（2019）が保護者支援の困難感に関する先行研究を分析した結果、保護者支援において保護者の養育態度や要求の強い保護者など「保護者自身に起因する困難感」に関するものが最も多いことが明らかにされている。さらに、職員の助言を聞き入れなかったり、要求がエスカレートしたりするなど保護者の園への支配的態度をとる保護者は、保育士にとって関わりが難しいと認知され、保育士のバーンアウトの「情緒的消耗感」と関連している（黒川ら 2014）。以上のことから、子どもの最善の利益を目指し、子どもの視点に立つ保育士は、保護者との対応において困難感をもつことが考えられる。

一方、寺藺（2013）によると、保育士の保護者対応時のストレスやストレスに対する認知的評価は保育者効力感と関連し、保育士が保護者対応時に自分で対応できると評価したり、保護者対応に対する問題の解決策を考え、積極的に解決しようとしたりすることが効果的なストレス対処となるという。このことから、保育士が対象となる親子を多様な視点からアセスメントし、必要な支援を見出し、実践していくことにより、保育士としての発達も期待される。

そこで本研究では、保護者の子どもへのかかわりに焦点を当て、保育士の支援に対する意図や支援方法が保護者や子ども、そして保育士自身へどのように影響するのかについて、そのプロセスを解明するとともに、保育士による保護者支援の課題に示唆を得ることを目的とする。

## 2. 方法

### 2-1. 調査対象者

20代から40代の保育士7名であった（表1）。

表1 対象者の属性

| 対象者 | 性別 | 年齢  | 保育士経験年数 |
|-----|----|-----|---------|
| A   | 女性 | 27歳 | 7年      |
| B   | 女性 | 43歳 | 23年     |
| C   | 女性 | 38歳 | 12年     |
| D   | 女性 | 43歳 | 20年     |
| E   | 女性 | 26歳 | 6年      |
| F   | 女性 | 28歳 | 6年      |
| G   | 女性 | 29歳 | 8年      |

### 2-2. 調査時期

2019年10月

### 2-3. 調査方法

保育士に対して、自由記述による質問紙調査を実施した。保護者の「子どもへのかかわり」への支援についての質問項目は以下の通りである。

- (1) 支援をしようと思った理由。
- (2) どのような支援をしたか。
- (3) 支援をした結果、保護者の様子に変化などあるか。
- (4) 支援後、保育士自身の気持ちに変化などあるか。

## 2-4. 分析方法

自由記述より得られたデータを、大谷（2008）による Steps for Coding and Theorization（以下、SCAT）を用いて分析した。具体的には、自由記述により得られた逐語録をデータとし、SCAT の手順に沿って抽出された構成概念をもとに、ストーリー・ラインを作成した。また、データの信頼性を担保するために、筆者らでデータの解釈や分析における妥当性の確認を行なった。具体的な手順として、①データの中の着目すべき語句、②それを言い換えるためのデータ外の語句、③それを説明するための語句、④そこから浮き上がるテーマ・構成概念、の順にコードを考えて付していく 4 ステップのコーディングとそのテーマ・構成概念を紡いでストーリー・ラインを記述し、そこから理論を記述する手続きとからなる分析手法である。

本研究では、どのような意図から保護者支援をし、保護者や保育士自身へ影響したのかという、保育士の記述の背景の文脈に含まれる潜在的な意味を見出す上で適切であると判断し、本手法を採用した。

尚、本稿では、理論化以前のストーリー・ラインまでを対象としている。

## 2-5. 倫理的配慮

研究参加は任意であり、質問紙の提出をもって研究への同意とみなすこと、得られたデータは本研究に限って使用すること、および研究結果の公表は個人が特定されないようにすることを質問紙の表紙に明記した。なお、本研究は国立大学法人埼玉大学におけるヒトを対象とする研究に関する倫理委員会の承認を得て実施した（承認番号：R1-E-4）。

## 3. 結果

### 3-1. 保育士のストーリー・ライン

調査対象者の自由記述を分析した結果、紡ぎ出されたストーリー・ラインを以下に示す。なお、〔 〕は抽出された構成概念である。

#### (1) A 保育士

A 保育士は保護者の〔体調不良児の保育に対する認識の低さ〕や〔子どもの最善の利益に対する保育士-保護者間の相違〕から保護者支援の必要性を有した。体調不良の子どもを預ける保護者に対して〔体調不良児に対する園の方針の解説〕をし、子どもを預かった。A 保育士は〔体調不良児のアセスメントとケア〕をする一方で、〔保護者への経過報告〕をした。その結果、保護者は〔体調不良児の保育に対する支配的な態度〕を示し、A 保育士は〔保育士-保護者の関係性に起因する不安〕を抱いた。しかし、A 保育士は〔保護者支援の省察〕から、〔保護者支援の課題〕を見出すと共に、〔個々のニーズに応じた子どもへの配慮〕をしようと考えた。

#### (2) B 保育士

B 保育士は〔カウンセリングマインドを備えた保育士〕であり、〔援助志向性の高さ〕から〔育児に対する動機づけの向上を目指した助言〕をするため、〔子どもの発達の解説〕、〔行動見本の〕

提示〕、〔保育体験の提供〕、〔保護者間の関係構築〕を活用した〔カウンセリングマインドを活かした保護者支援〕を実践した。結果、母親は〔育児のエンパワメント〕を獲得し、〔親子の関係性構築の契機〕に繋がった。〔保護者支援を省察する態度〕をもって支援に臨むB保育士は、〔自律的な動機づけによる保護者支援〕を通して、〔保護者支援に対する充実感の高まり〕を実感していた。

### (3) C 保育士

C保育士は、〔0歳児保育の開始〕の乳児に対し、〔子どものアセスメント〕をし〔子どもの発達に対する懸念〕や〔離乳期の少食な子どもへの懸念〕から保護者へ〔発達支援の技術〕や〔生活援助の技術〕を活用した〔指導の必要性〕を感じた。そこで、C保育士は、保護者に対して、〔家庭での育児方法に対するアセスメント〕をし、〔発達援助の技術〕、〔遊びを展開する技術〕を活用して〔育児方法の情報提供〕をした。その結果、保護者は〔情報提供に対する肯定的な態度〕をとる一方で、〔情報提供前後の変わらぬ育児〕や〔情報提供前後の変わらぬ仕事量〕を示した。C保育士は、〔保護者の肯定的な応答に対する満足感〕を得ると同時に〔変化しない保護者の姿への葛藤〕から〔伝え方・対応の仕方起因する困難感〕を有した。

### (4) D 保育士

D保育士は、〔仕事復帰時の多重役割を担う保護者への共感的態度〕を示すことで、〔離乳期の子どもの最善の利益を意図した保護者支援〕に繋がると考えた。そこで、〔離乳期の保護者の育児不安のアセスメント〕と〔離乳期の子どもの生活リズムのアセスメント〕から、保護者支援をしようと考えた。D保育士は、〔基本的生活習慣の改善を目的とした保育計画〕を検討したり、〔発達援助の技術〕や〔生活援助の技術〕を活用して保護者へ〔育児方法の情報提供〕をしたりした。その結果、保護者は〔情報提供に対する肯定的な態度〕を取ったが、実際は〔情報提供前後の変わらぬ育児〕であった。D保育士は、〔保護者支援の省察〕から〔育児困難感をもつ母親へのカウンセリングマインドの必要性〕を実感し、〔保護者視点の支援観の形成〕へと繋がった。

### (5) E 保育士

E保育士は〔集団生活における子どもの困難感〕から〔子どもの愛着形成への懸念〕をし、〔養育態度に対するネガティブな評価〕をしたことから支援の必要性を有した。そこで、E保育士は保護者の〔育児状況の情報収集〕や保護者へ〔積極的な情報提供〕をしながら、子どもの様子の〔保護者-保育園間共有〕に努めた。また、保護者に対して、〔積極的な行動見本の提示〕や〔積極的な育児方法の要請〕をした。その結果、〔親子間コミュニケーションの促進〕がなされ、保護者は〔子どものネガティブ感情に対する共感的養育態度〕を示した。しかし、E保育士は、〔保護者支援に対する自信喪失〕や〔保育士-保護者の関係性に起因する不安〕を抱いた。

### (6) F 保育士

F保育士は、〔親として初めての育児〕をする〔保護者の育児不安への支援〕に対して、〔保育士の役割取得能力〕を活かした〔親子のアセスメント〕をする中で、〔発達援助の技術〕や〔生活援助の技術〕を活用した〔保護者視点の支援の必要性〕を有した。そこで、F保育士は、〔育児不安に関連した親子のアセスメント〕をし、〔保育士-保護者間の信頼関係〕を構築しながら、保護

者の「安心した子育て環境の整備」に努め、「発達援助の技術」、「生活援助の技術」や「遊びを展開する技術」を活用し、「育児方法の情報提供」や「子どもの発達の解説」を実践した。支援に際し、F保育士は常に「保護者支援を省察する態度」を有していた。その結果、「保育士-保護者間の信頼関係」は構築され、保護者の「育児不安の軽減」が図られると同時に、保護者は「育児に対する自己効力感」をもち、「子ども理解の促進」もなされた。「育児不安の軽減に対する支援」に対して、「カウンセリングマインドを備えた支援者」になりたいという「保護者支援の展望」をもった。また、「保護者支援を省察する態度」を備えたF保育士は、「保護者支援に対する充実感の高まり」を有した。

#### (7) G 保育士

G 保育士は、「保護者の育児不安への支援」に対して、「親子のアセスメント」をし、「行動見本の提示の必要性」や「カウンセリングマインドを活かした保護者支援」の必要性を有した。そこで、G 保育士は、「保育士-保護者間の情報共有」しながら、「子どもの発達の解説」、「行動見本の提示」や「支持的かかわり」を活用した「カウンセリングマインドを活かした保護者支援」を実践した。その結果、「保育士-保護者間の関係構築」は促進し、保護者からの「援助要請行動の促進」がみられるようになった。G 保育士は「支援者の資質としての柔軟性」や「多様な育児観」をもつことの大切さを実感すると同時に、保護者の「育児に対する自己効力感へのアプローチ」をしていくことの必要性を見出した。

#### 3-2. 抽出された概念の分類

抽出された概念をテーマ（『動機』、『支援内容』、『保護者への影響』、『保育士自身への影響』）ごとに分類した結果を表2に示す。以下、テーマは『 』、カテゴリは「 」、概念は〔 〕で示した。7名の記述から得られた概念は、合計104個で、テーマごとに『動機』は30個、『支援内容』は35個、『保護者への影響』は16個、『保育士自身への影響』は23個であった。抽出された概念を分類した結果は以下の通りである。『動機』は、「保育士の資質・能力（8件）」、「子どもの最善の利益（10件）」、「保護者視点の支援（7件）」、「保育技術・知識を生かした支援の必要性（4件）」、「保育相談技術を生かした支援の必要性（1件）」に分類された。『支援内容』には、「保育士の資質・能力（4件）」、「子どもへの配慮（2件）」、「保護者の安心感（4件）」、「保育技術・知識（7件）」、「保育相談技術（18件）」に分類された。『保護者への影響』には、「養育力の向上（7件）」、「保育士との良好な関係性（5件）」、「ネガティブな態度（1件）」、「変化しない態度（3件）」に分類された。『保育士自身への影響』には、「保育士の資質・能力（4件）」、「支援者としての発達（11件）」、「充実感（3件）」、「困難感（5件）」に分類された。

表 2. 抽出された概念の分類

| テーマ       | カテゴリ               | 概念  |
|-----------|--------------------|---|
| 動機        | 保育士の資質・能力          | カウンセリングマインドを備えた保育士／援助志向性の高さ／子どものアセスメント／<br>離乳期の保護者の育児不安のアセスメント／離乳期の子どもの生活リズムのアセスメント／<br>保育士の役割取得能力／親子のアセスメント／   |
|           | 子どもの最善の利益          | 体調不良児の保育に対する認識の低さ／<br>子どもの最善の利益に対する保育士-保護者間の相違／0 歳児保育の開始／<br>子どもの発達に対する懸念／離乳期の少食な子どもへの懸念／指導の必要性／<br>離乳期の子どもの最善の利益を意図した保護者支援／集団生活における子どもの困難感／<br>子どもの愛着形成への懸念／養育態度に対するネガティブな評価／              |
|           | 保護者視点の支援           | 育児に対する動機づけの向上を目指した助言／<br>仕事復帰時の多重役割を担う保護者への共感的態度／親として初めての育児／<br>保護者の育児不安への支援／保護者視点の支援の必要性／<br>カウンセリングマインドを活かした保護者支援／  |
|           | 保育技術・知識を生かした支援の必要性 | 発達支援の技術／生活援助の技術／  |
|           | 保育相談技術を生かした支援の必要性  | 行動見本の提示の必要性／  |
| 支援内容      | 保育士の資質・能力          | 家庭での育児方法に対するアセスメント／育児状況の情報収集／<br>育児不安に関連した親子のアセスメント／保護者支援を省察する態度／   |
|           | 子どもへの配慮            | 体調不良児のアセスメントとケア／基本的生活習慣の改善を目的とした保育計画／   |
|           | 保護者の安心感            | カウンセリングマインドを活かした保護者支援／保育士-保護者間の信頼関係／<br>安心した子育て環境の整備／   |
|           | 保育技術・知識            | 発達援助の技術／生活援助の技術／遊びを展開する技術／  |
|           | 保育相談技術             | 体調不良児に対する園の方針の解説／保護者への経過報告／子どもの発達の解説／<br>行動見本の提示／保育体験の提供／保護者間の関係構築／育児方法の情報提供／<br>積極的な情報提供／保護者-保育園間共有／積極的な行動見本の提示／<br>積極的な育児方法の要請／保育士-保護者間の情報共有／支持のかかわり／                                     |
| 保護者への影響   | 養育力の向上             | 育児のエンパワメント／親子の関係性構築の契機／親子間コミュニケーションの促進／<br>子どものネガティブ感情に対する共感的養育態度／育児不安の軽減／<br>育児に対する自己効力感／子ども理解の促進／   |
|           | 保育士との良好な関係性        | 情報提供に対する肯定的な態度／保育士-保護者間の信頼関係／<br>保育士-保護者間の関係構築／援助要請行動の促進／   |
|           | ネガティブな態度           | 体調不良児の保育に対する支配的な態度／   |
|           | 変化しない態度            | 情報提供前後の変わらぬ育児／情報提供前後の変わらぬ仕事量／   |
| 保育士自身への影響 | 保育士の資質・能力          | 保護者支援の省察／保護者支援を省察する態度／  |
|           | 支援者としての発達          | 保護者支援の課題／個々のニーズに応じた子どもへの配慮／<br>自律的な動機づけによる保護者支援／<br>育児困難感をもつ母親へのカウンセリングマインドの必要性／保護者視点の支援観の形成／<br>育児不安の軽減に対する支援／カウンセリングマインドを備えた支援者／<br>保護者支援の展望／支援者の資質としての柔軟性／多様な育児観／<br>育児に対する自己効力感へのアプローチ／ |
|           | 充実感                | 保護者支援に対する充実感の高まり／保護者の肯定的な応答に対する満足感／   |
|           | 困難感                | 保育士-保護者の関係性に起因する不安／変化しない保護者の姿への葛藤／<br>伝え方・対応の仕方に起因する困難感／保護者支援に対する自信喪失／  |

## 4. 考察

これまでの先行研究においても保育士が抱える保護者支援時の困難感は何多く報告されている（岸本ら 2019）。本研究でも、『保育士自身への影響』において「困難感」は 5 件、確認された。一方、「保育士の資質・能力」、「支援者としての発達」や「充実感」といったポジティブな影響も含まれていた。そこで、『保育士への影響』を軸として、特徴的な保護者支援のプロセスを考察する。以下、テーマは『 』、カテゴリは「 」、概念は〔 〕、テキストは斜体で示した。

### 4.1. 保育士が『困難感』を抱く保護者支援実践プロセス

保育士が行なう保護者支援において、保護者との関係構築はとても重要であり、保育士の専門性を高めていくことを努力している一方で、“保護者との関係構築は簡単ではない”という、保育士の懸念、困難、痛恨という下位概念が明らかにされている（橘田 2015）。今回分析した E 保育士の保護者支援実践プロセスでも、同様の点がみられる。保育士は日々、子どもの視点に立ちながら保育を行なっている（亀崎 2017）。E 保育士も同様に、*子どもが集団生活で困っている、子どもが甘えたい、母の子に対する関わり方が冷たい*など、〔集団生活における子どもの困難感〕から〔子どもの愛着形成への懸念〕をし、〔養育態度に対するネガティブな評価〕をするという「子どもの最善の利益」を理由に保護者支援の必要性を有したことが明らかとなった。保護者に対して「保育相談技術」を活用し、熱心にアプローチした結果、保護者の「養育力の向上」が確認されたが、*こちらの意図が伝わるか、受け入れてくれるかという不安*、といった「困難感」を抱いていた。このことから、「子どもの最善の利益」を図るという動機をもち、「保育相談技術」を活用した支援の効果を実感しても、保育士は保護者との信頼関係に対する不安から保護者支援に対する困難感を抱くことが考えられる。

### 4.2. 保育士が『充実感』と『困難感』を抱く保護者支援実践プロセス

保育士が保護者支援で抱える困難感には、保護者への伝え方や相談に対する回答など保育士自身に起因する困難感が明らかにされている（岸本ら 2019）。今回分析した C 保育士の保護者支援実践プロセスでも、同様の点がみられる。C 保育士は保育士の専門性を生かし、〔子どものアセスメント〕から「子どもの最善の利益」や「保育技術・知識を生かした支援の必要性」を理由に保護者支援の必要性を有したことが明らかとなった。支援の際も保育士の専門性を生かし、〔家庭での育児方法に対するアセスメント〕をしながら、「保育技術・知識」や「保育相談技術」を活用していた。支援後に C 保育士は、*前向きな返事をいただけたことと、「相談して良かった」と言ってもらえたことがあったので、とても嬉しく思っていたのだが、母親の変わらない姿に今後、どのように接していけば良いのか悩んでいる*、と〔保護者の肯定的な応答に対する満足感〕を得ると同時に〔変化しない保護者の姿に葛藤〕や〔伝え方・対応の仕方に起因する困難感〕を有した。このことから、「子どもの最善の利益」を図るという動機をもち、保育士としての専門性を生かした保護者支援をした結果、保護者の保育士に対する応答に満足しても、保護者の養育態度が変化しない場合、保育士は葛藤を生じ、保護者支援に対する困難感を抱くことが考えられる。

### 4.3. 『困難感』を契機に『支援者としての発達』を実感する保護者支援実践プロセス

A 保育士は、保護者の〔体調不良児の保育に対する認識の低さ〕や〔子どもの最善の利益に対

する保育士-保護者間の相違」という「子どもの最善の利益」を理由に保護者支援の必要性を有したことが明らかとなった。A 保育士は園の方針に従い、体調不良の子どもの保育と保護者対応をしたが、保護者は、様子見の電話はもらない・・・38.0℃以上に2回以上なったら連絡をください、と〔体調不良児の保育に対する支配的な態度〕を示し、A 保育士は〔保育士-保護者の関係性に起因する不安〕を抱いた。しかし、A 保育士は、保育園への不信感・・・また何か言われてしまうかもしれないと保護者が感じているかもしれない・・・と自身の〔保護者支援の省察〕を通して、できるだけ、子どもの様子や良かったこと等を伝える等コミュニケーションを取ろうと思った・・・と、〔保護者支援の課題〕を見出すと共に、また、保護者の関わりが少ない子は、できるだけ園で関わろうと思った・・・と〔個々のニーズに応じた子どもへの配慮〕をするといった「支援者としての発達」を遂げていた。子どもの最善の利益とは固定的なものではなく、状況によって変化しやすい不確実なものである（亀崎 2017）。保育の質の向上を図るには、保育所において子どもの保育にかかわるあらゆる職種の職員一人一人が、その資質を向上させることが大切である。特に、保育士は、毎日の保育実践とその振り返りの中で、専門性を向上させていくことが求められている（厚生労働省 2018）。このことから、A 保育士は保護者支援に対する困難感を契機に、子どもにとっての最善の意味を捉え直し、親子のニーズを保障する支援への展望をもったことが考えられる。以上より、保護者支援に対して困難感を抱いても、保育士が自身の支援を振り返ったり、子どもの最善の利益を捉え直ししたりすることにより保護者支援の幅が広がり、支援者としての専門性を高めていくことが考えられる。

#### 4.4. 保育士にポジティブな影響を与える保護者支援実践プロセス

今回の研究では、保護者支援実践プロセスの4件のストーリー・ラインにおいて保育士にポジティブな影響が確認された。

以下に、4つのテーマごとに（『動機』、『支援内容』、『保護者への影響』、『保育士自身への影響』）考察を述べる。

『動機』のカテゴリは、「保育士の資質・能力」、「子どもの最善の利益」、「保護者視点の支援」、「保育技術・知識を生かした支援の必要性」、「保育相談技術を生かした支援の必要性」の5つのカテゴリで構成されていた。

保育所においては、子どもの健全な心身の発達を図るという目的の下（厚生労働省 2018）、保育に当たっている。また、保育所における保育は、保護者と共に子どもを育てる営みである（厚生労働省 2018）。子どものケアを主とする小児看護の領域では、看護の目標を達成するために、家族全体を視野に入れ、子どもが安全で安心できる環境のなかで育まれ、健康な生活が保障されることを目指した看護の実践が求められている（荃津 2015）。小児看護実践に際しては、子どもと家族の状況を系統的、意図的に情報収集し、情報の整理、分析、判断を行ない、看護問題を明らかにすることで、看護援助の必要性、方向性を明らかにしていくプロセス、すなわち、アセスメントを実行する（荃津 2015）。以上より、子どもの家族、主に保護者は子どもが健全に育つための環境という視点で、小児看護実践と保育実践は重なる部分があると考えられる。今回の研究において、保護者に対してなるべく肯定的に関わりたいという B 保育士の〔援助志向性の高さ〕や育児に一生懸命であるので、子どもの姿に不安や戸惑いを感じ、自分で抱え込んでしまうことが多いからという F 保育士の〔保育士の役割取得能力〕を生かし、子どものみならず、親子の状態をアセスメントし（D・F・G 保育士）、「保護者視点の支援」の必要性を有している（B・D・F・G 保育士）ことが明らかとなった。このことから、保護者支援の際、保育士の専門性を生かし、親子の姿を多様な視点から



情報収集し、支援の必要性を判断し、保護者の視点から保護者の育児に対する課題解決を試みようとするプロセスは、小児看護実践と重なる部分もあると考える。また、保育士がこれら課題を確認するプロセスを『動機』に「保護者視点の支援」の必要性を見出すことにより、保育士にポジティブな影響を与える可能性が示唆された。

『支援内容』のカテゴリは、「保育士の資質・能力」、「子どもへの配慮」、「保護者の安心感」、「保育技術・知識」、「保育相談技術」の5つのカテゴリで構成されていた。また、支援に対する『保護者への影響』のうち、「養育力の向上」、「保育士との良好な関係性」、「変化しない態度」の3つが保育士へポジティブな影響を与えていた。今回の研究で「養育力の向上」や「保育士との良好な関係性」というような保護者へポジティブな影響を与えていたB・F・G保育士に共通していた『支援内容』は「保護者の安心感」である。実際、保護者の安心感を中心とする情緒的な支援をすることにより、以下のように保護者に変化が確認された。「養育力の向上」では、保護者が“自分（母親）の関わりで子どもが変わった…、成長した…”といった経験をする、それが大きな自信となったり、親子の絆を深めるきっかけになるように感じます（B保育士）や担任との関係性が変わってきたことで、安心感から視野も広がり、「大丈夫」と思えるようになってきた…他の子の姿も見て、子どもの成長にも気付き、喜ぶ姿も出てきた（F保育士）などの内容が確認された。また、G保育士の記述では、話をしている際に母親が目を潤ませ、話を聞いていた…仕事の話やグチ等を母親の方から話すようになった、と「保育士との良好な関係性」が構築されたりしていた。乳幼児期の子どもをもつ母親に対する支援に関して、子育てによる育児負担感の軽減（海老原ら2004）、母親の主観的幸福感（加藤2008）を保持するための情緒的な支援の必要性が明らかにされている。また、育児知識や技術の提供・援助に加え、「自分は大丈夫である」、「自信がついた」という実感がもてるような情緒的サポートの必要性も示唆されている（西出ら2011）。以上より、保護者に安心感を与えながら保育士の専門性を生かした保護者支援をすることにより、保育士との信頼関係が構築されながら、保護者の養育力も向上する可能性が示唆された。また、こうした保護者の姿から、保育士へもポジティブな影響を与える可能性が示唆された。

『保育士自身への影響』の4つのカテゴリのうち、「保育士の資質・能力」、「支援者としての発達」、「充実感」の3つが保育士へポジティブな影響であった。「支援者としての発達」や「充実感」といった保育士自身へポジティブな影響を支えていたのが「保護者支援を省察する態度」（B・F保育士）や「保護者支援の省察」（D保育士）といった「保育士の資質・能力」である。Schön（1983=2001）は専門家を示す概念として「反省的実践家」を提唱している。上山ら（2015）によると、保育者は子どもの状態に気づき、分析的に振り返るといった省察を行なうことで保育実践力の認知が高まるという。今回の保護者支援でも同様の点が確認される。D保育士は、保育士の専門性を活用した保護者支援を実践したが、保護者の養育行動は変化しなかった。しかし、D保育士は自身の「保護者支援の省察」を通して、日々の生活に追われているので、自分がアドバイスするより、母親の気持ち等を聴いてあげることが大切だなあと改めて考えさせられる…同じクラスの保護者の方と掛け橋になって気軽に話せる関係を築けると良いのかな？と「育児困難感をもつ母親へのカウンセリングマインドの必要性」を有し、「保護者視点の支援観の形成」へと繋がった。このことから、自らの保護者支援を省察することにより、明日の保護者支援を見出す契機となり、支援者として発達する可能性が示唆された。

現代の親は、核家族化や少子化の影響から、育児にかかわる一般的な知識の提供や育児不安を緩和する精神的支援をこれまで以上に必要としているため、親の育児を支えることも小児看護の

重要な役割である（二宮2017）。子どもの健全な発達を支えるという視点では、保育も同様のことが言える。今回の研究でF保育士は、〔親子のアセスメント〕を通して〔保護者の育児不安への支援〕に向けて、〔保育士-保護者間の信頼関係〕と〔安心した子育て環境の整備〕に努めながら、保護者支援を展開していた。結果、保護者は〔保育士との良好な関係性〕の中で、保護者の養育力は向上した。以上より、子どものケアを主とする小児看護と同様に、子どもの育ちを支える保育においても、親子全体のアセスメントをした上で、保護者の気持ちに寄り添いながら、保護者の養育力の向上を目指すことも保育士の重要な役割であることが考えられた。また、F保育士は、保護者支援の実践の振り返りを通して、担任に話すことで少しでも心が軽くなったり、気持ちに共感、共有して悩みを一緒に解決していったらと思った・・・親子関係は良好であるとすごく感じている、と〔保護者支援の展望〕をもつと同時に、自らの支援に対する確かな自信をもつことができた。このことから、親子のニーズに応じた保護者支援を実践し、親子のニーズが充足されることで、保育士自身の支援者としての発達に繋がる可能性も示唆された。

## 5. まとめと今後の課題

本研究では、保護者の子どもへのかかわりに焦点を当て、保育士の支援に対する意図や支援方法が保護者や子ども、そして保育士自身へどのように影響するのかについて、そのプロセスを解明した。その結果、先行研究と同様に、保護者支援に対する困難感を抱いている保育士が確認された。一方、保護者支援を通して、保育士が親子のニーズを充足することは、保育士の充実感や支援者としての発達を促進する可能性が示唆された。また、保護者支援を通して親子のニーズを充足するためには、保育士のアセスメント力や省察など、保育士の資質・能力の高さが影響する可能性も考えられた。これらの結果を踏まえ、今後は、保育士が親子のニーズを充足する保護者支援をする際に活用できるアセスメントツールを開発し、その有用性の検証をしていく必要がある。

## 謝辞

本研究にご理解とご協力を賜りました、保育士の皆様に心より感謝申し上げます。

本研究は、科学研究費助成事業（基盤研究 C）（課題番号：17K01889）の助成を受けて実施した。

なお、本論文の一部は日本発達心理学会第 31 回大会で発表した。

## 引用文献

浅見侑子・柴田玲子（2013）.子どもの QOL に関連する母親のアイデンティティ「個」と「関係性」の 2 側面からの検討－. 子どもの健康科学 13, pp9-16.

海老原亜弥, 秦野悦子（2004）. 保育園児・幼児園児を育てる母親の育児負担感－ストレス、コーピング、ソーシャルサポートとの関係－. 小児保健研究 63, pp660-666

亀崎美沙子（2015）.保育所保育士の感じる保育相談支援の困難性に関する要因の検討－保育所保育士の感じる保護者とのかかわりの難しさを手がかりに－.第 1 回サクセス保育・幼児教育研究懸賞論文.<https://www.like-kn.co.jp/wp/wp-content/uploads/2015/05/kamezaki.pdf> .（2020.3. 8 閲覧）.

亀崎美沙子（2017）.保育士の役割の二重性に伴う保育相談支援の葛藤-親・子の相反ニーズにおける子どもの最善の利益をめぐって-.保育学研究 55, pp68-79.

柏女霊峰監修（2010）．保護者支援 スキルアップ講座 保育者の専門性を生かした保護者支援-保育相談支援（保育指導）の実際．大阪：ひかりのくに．

加藤孝士（2008）．母親の主観的幸福感とソーシャル・サポートの関係ー最も関わる人物からのサポートー．小児保健研究 67, pp557-62.

橘田康代（2015）．保育所保育士における「保護者支援」実践知からの考察ー保護者との「関係構築」に焦点を当ててー．社会福祉学評論 15, pp1-13.

荃津智子（2015）．「第1章 小児看護における看護過程」．荃津智子編．『発達段階を考えたアセスメントに基づく小児看護過程』．東京：医歯薬出版社．pp1-24.

岸本美紀・武藤久枝（2019）．保育者が保護者支援で抱える困難感の内容と構造．岡崎女子大学・岡崎女子短期大学研究紀要 52, pp 39-46.

厚生労働省．健やか親子 21（第2次）ホームページ．[sukoyaka21.jp/](http://sukoyaka21.jp/) ．（2020.3. 8 閲覧）．

厚生労働省編（2018）．保育所保育指針解説．東京：フレ・ベル館．

黒川祐貴子・青木紀久代・山寄玲奈（2014）．関わりの難しい保護者像と保育者のバーンアウトの実態．小児保健研究 73, pp 539-546.

二宮啓子（2015）．「第1章 小児看護を実践するための基礎知識：1. 小児看護とは」．二宮啓子・今野美紀編『小児看護概論（改訂第3版）子どもと家族に寄り添う援助』．東京：南江堂．pp1-7.

西出弘美，江守陽子（2011）．育児期の母親における心の健康度（Well-being）に関する検討ー自己効力感とソーシャルサポートが与える影響についてー．小児保健研究 70, pp20-26.

大谷 尚（2008）「4 ステップコーディングによる質的データ分析手法 SCAT の提案ー着手しやすく小規模データにも適用可能な理論化の手続きー」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要（教育科学）』 54, pp27-44.

大谷 尚（2019） 質的研究の考え方ー研究方法から SCAT による分析まで 愛知：名古屋大学出版会．

小代仁美・高野政子・山内美奈子（2014）．保育所で発熱した乳幼児の保護者との対応の際の保育士の困難．看護科学研究 12, pp 53-57.

Schön , Donald.A. The Reflective Practitioner, Basic Book, (1983) ．(佐藤学・秋田喜代美訳（2001）『専門家の智慧 反省的实践家は行為しながら考える』．東京：ゆみる出版）．

高橋真由美（2015）．保育所における保護者支援研究の現代的課題．藤女子大学 QOL 研究所紀要 10, 1 pp 41-145.

寺藺さおり（2013）．保育士のストレスマネジメント教育に関する予備調査：保護者対応時に着目して．倉敷市立短期大学研究紀要 57, pp 77-86.

上山瑠津子・杉山伸一郎（2015）．保育者による実践力の認知と保育経験および省察との関連．教育心理学研究 63, pp401-411.

山口雅史（2010）．母親になるということー母親アイデンティティを巡る考察ー．京都：あいり出版．

（2020年3月31日提出）  
（2020年4月10日受理）

# **The Process in Practice of Parent Support by Nursery Teachers**

## **Focus on Mother's Involvement**

**TERAZONO, Saori**

**YOSHIKAWA, Haruna**

Faculty of Education, Saitama University

**UEOKA, Kimi**

Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education

### **Abstract**

The purpose of this study is to clarify the process in practice of parent support by nursery teachers. Authors analyzed description by the seven nursery teachers using SCAT(Steps for Coding and Theorization). The analysis revealed that they felt difficulty in parent support; this result was similar to those reports in previous studies. On the other hand, we confirmed that satisfying the needs of parent-child by nursery teachers promote the sense of fulfillment of nursery teachers and their development as supporters. We also confirmed that the ability of nursery teacher, such as assessment skills and reflection, affected their practice to satisfy the needs of parent-child.

**Keywords** : nursery teacher, practice of parent support, process